

Report 3.0T MRI

転ばぬ先のMRI

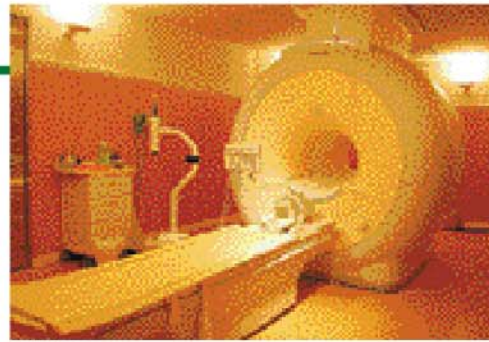
「脳卒中を予防する」——②

～解離性脳動脈瘤の早期発見と治療～

1 頭痛やめまいの問診と3.0T MRI

2007年7月に3.0T MRIを導入して以来、脳卒中の前兆である血管病変の発見が増加しています。今回は頭痛やめまいを訴える方の中にみられる解離性脳動脈瘤を紹介します。この病気は3.0T MRIにより迅速に診断ができますが、まずは最初に出会う外来看護師がこの病気を疑い、患者さんから詳しくお話を伺うことが重要です。

今年9月に札幌で開かれた「日本脳神経看護研究会」では、この解離性脳動脈瘤の早期発見へ向けた問診の工夫とその成果について発表しました。



3.0T MRI
(PHILIPS社製 Achieva 3.0T MR Systems Release 2.5.3.0)

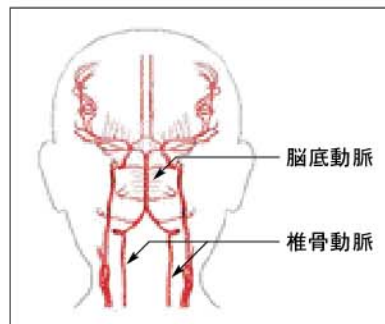
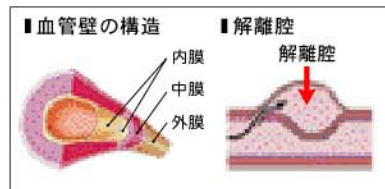


外来看護師 高木千恵子さん

2 解離性脳動脈瘤とは

動脈は内膜、中膜、外膜の三層からなります。解離性脳動脈瘤とは、膜の内側に裂け目(解離)が生じ、その裂け目から血管壁の中に血液が流れ込んでいる状態です。この血液が流れ込んでいる空間を解離腔と言います。これにより血管が内側に圧迫されれば脳梗塞、外側に膨らみ破裂すればくも膜下出血を引き起こします。

解離性脳動脈瘤の起こりやすい場所は、椎骨動脈、脳底動脈と呼ばれる血管です。



この病気の原因は未だに明らかになってはいませんが、統計上40～50歳代の男性で、長年の喫煙歴のある方に多いことがわかっています。

3 治療の実際

症状が出現してから数週間は解離した部位の大きさや形が変わることがあり、3.0T MRIなどによる慎重な経過観察を行います。脳梗塞やくも膜下出血を起こす可能性がある場合は手術が必要なこともあります。



最新CTスキャン 2009年7月から稼働

森の木に新たな検査機器が導入されました。これまでのCTスキャンよりも高画質の画像が短時間で得られ、3.0T MRIと合わせて行うことで、診断や治療の精度が向上しています。



腰椎の3D画像

リハビリテーション at ツバメホール

新たな力を!!

～高次脳機能障害への挑戦～

脳の機能低下を早期に発見し活性化を促す。

高次脳機能障害とは...

- 記憶障害
 - ・新しいことを覚えられない。
 - ・昔のことが思い出せない。
- 失語症
 - ・思ったことが言葉にならない。
 - ・話が理解できない。
 - ・文字の読み書きができない。
- 遂行機能障害
 - ・注意力が散漫で集中できない。
 - ・思考力や判断力の低下。
- 失行症・失認症
 - ・熟練した動作が拙劣。
 - ・物の形や色などを正しく認識できない。

軽度認知障害

(物忘れが気になる、集中力の低下)

認知症

(記憶力の低下で社会生活に支障がある)

言語療法室では、言語や記憶のリハビリに加えて、認知症の進行予防などに取り組んでいます。

言語聴覚士
高橋 美和

高次脳機能障害とはどのようなものですか？

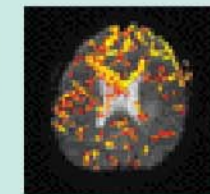
記憶力や判断力、思考力など人に特有の脳の働きが低下するものです。その代表的なものとして、脳卒中やアルツハイマー病による認知症がありますが、最近この前段階である軽度認知障害が注目されています。

認知症を初期の段階で見つけるのですね。

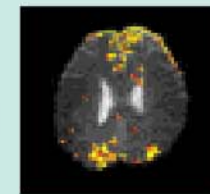
認知症とは、日常の社会的な生活に支障をきたすほどまでに記憶力や判断力などが低下した状態を言いますが、これは突然やってくるものではありません。多くの場合は数年かけて進行していきます。「同じことを何回も聞き返す」「活気がない」など家族や本人の訴えが早期発見の鍵となります。森の木では医師の診察や3.0T MRIによる脳の検査に加え、言語聴覚士や看護師、ソーシャルワーカーによる詳細な問診や検査を行い、その支援に役立てています。

これからの取り組みについて教えてください。

高次脳機能の低下は自覚しにくく、身体の症状のように目に見えないので、記憶検査などを組み合わせて行っても、的確に把握することが難しい場合もあります。3.0T MRIでは、脳卒中などの脳の病気だけでなく、脳の働きについても捉えることができますので、これを活用して行くのが今後の課題です。認知症の予防や治療は発展途上の領域ですが、しっかり勉強して皆様のお役に立てれば、と考えています。



文字の読解が難しくなった脳の状態。



言葉のリハビリで脳の働きを取り戻しました。

脳を元気に! アイアイルーム

転倒防止策

《通所リハビリテーション》

アイアイルームでは、身体のリハビリだけでなく、脳の活性化を目指しながら楽しくレクリエーションを行っています。

また、快適な生活を送るための提案や相談にも取り組んでいます。その中で、自宅での転倒が思いのほか多いことがわかり、どんな場所でどのように転倒したのか、アンケートを採り集計しました。その結果をご家族や利用者にお知らせすることで、実際の生活場面での工夫や改良をしやすいように支援しています。このような活動については、11月に開かれる日本通所ケア研究大会(広島・福山市)で発表することになっています。

転倒経験の有無



転倒の多い季節



軽体操やクイズなどのレクリエーションを楽しみながらのリハビリ風景。